

1 男女差別（Ⅱ女性差別）

・セックス 生物学的な性別

・ジェンダー 生物学的な性別を示すセックスに対して、社会的・文化的に形成される性別。作られた 男らしさ・女らしさ。

「ー・ギャップ」

（岩波書店 『広辞苑』）

狩猟時代は男は狩りをし女は子供を育てるといった役割分担はあったが、基本的には差別なし。農耕時代になって、耕地・水源などの開拓・確保・争奪の必要から、体力的にも腕力的にも強い男が優位のシステムへ

2 神話的・宗教的男女観

キリスト教 人（男）から取ったあばら骨で一人の女を造った（『旧約聖書』）

イスラム教 男が女より優れているとの文章（『コーラン』）

仏教 女には障りがあり、成仏できない。男に成って可能。女人禁制

儒教 夫婦の別、七去（『礼記』）

日本神話（『古事記』（イザナギ・イザナミの国生み））

ここに伊邪那美命に問ひて、「汝が身は如何にか成れる」と曰りたまへば、「吾が身は成り成りて、成り合はざる処、一処あり」と答へたまひき。ここに伊邪那岐命、詔りたまはく、「吾が身は成り成りて、成り余れる処、一処あり。故、この吾が身の成り余れる処をもちて、汝が身の成り合はざる処にさし塞ぎて、国土を生み成さむとおもふ。生むこといかに」とのりたまへば、伊邪那美命、「しか、善けむ」と答へたまひき。

↑ 等根源的な相補性 + アマテラス、アメノウズメの活躍

…かくて御二方で御相談になって、「今わたしたちの生んだ子がよくない。これは天の神様のところへ行って申しあげよう」と仰せられて、一緒に天に上のぼつて天の神様の仰せをお受けになりました。そこで天の神様のご命令で鹿の肩の骨をやく占いで占いをして仰せられるには、「それは女の方が先に物を言ったので良くなかったです。帰り降って改めて言い直した方がよい」と仰せられました。そういうわけで、また降っておいでになって、またあの柱を前のようにお廻りになりました。今度はイザナギの命みことがまず「ほんとうに美しいお嬢さんですね」とおっしゃって、後にイザナミの命が「ほんとうにりっぱな青年ですね」と仰せられました。かように言い終って結婚をなさって御子の淡路のホノサワケの島をお生みになりました。次に伊予の二名の島（四国）をお生みになりました

大陸からの文化・秩序化、武士の力による支配 ↓ さらに女性差別、男尊女卑風社会へ

3 近世の女子教育論

「女大学」

- 一、 女子は成長すると、他の家に嫁に行き、夫と舅・姑に仕えるのであるから、親は女子を幼少のころからきちんと教育しなければならない。
- 二、 女は容姿よりも心がすぐれていなければならない。和やかで従順、貞節で情け深く、静かであるのがよい。
- 三、 女子はあらゆる場面で、男女の別を正しくし、男子と交わったり親しんだりしてはならない。たとえ命を失っても、心を金属や石のように堅くして、義を守らなくてはならない。
- 四、 女は夫の家を我が家とするのであり、たとえその家が貧しくても、夫を怨んではならない。家が貧しいのは、天が自分に与えた運命のだと受け容れ、一度嫁入りしたら、その家を出てはならない。また、「七去^{しちきょ}」という、女性が離縁される七つの理由がある(姑に従順でない／子どもができない(ただし妾^{めかけ}に子どもができれば、離縁されなくともよい)／淫乱／けち／悪い病氣を持っている／おしゃべり／盗癖がある)。
- 五、 実の親より夫の親の方を大事にし、従順に勤め、背いてはならない。
- 六、 妻は夫を主君とし、従順に仕えなくてはならない。
- 七、 夫の兄弟姉妹やその嫁を敬え。
- 八、 嫉妬心を持つてはならない。夫に不義があるなら、言い含めるようにし、感情的に怒ってはならない。
- 九、 言葉は慎まなくてはならない。人の悪口や悪評を聞いても、他の人に言ってはならない。なぜならそれが家に騒ぎをもたらすからである。
- 一〇、 婦人は常にさまざまな配慮をしていなければならない。さまざまな仕事に勤め、嗜好品や趣味を楽しんではならないし、四〇才未満の女性は、神社仏閣等人の多く集まる場所に行くべきではない。
- 一一、 神仏に頼りすぎてはならない。人間のつとめをきちんとすれば、祈らずとも神仏は守ってくださる。
- 一二、 妻となったら、その家をきちんと保つように努力せよ。妻の行いが悪く、勝手気ままであれば、家はだめになる。万事儉約をこころがけること。
- 一三、 主婦がまだ若い場合は、どんな用事があるうとも、若い男に近づいてはならない。
- 一四、 装飾品や衣服は、目立たないもの、分相応なものにし、清潔にしておくこと。
- 一五、 実家より、夫方の家を重視せよ。また、夫の許可がなければ、どこにも行つてはならないし、贈り物をしてはいけない。
- 一六、 自分の親より、夫の親の方を大切に思い、孝行しなくてはならない。嫁入り後は減多に実家に行くべきではないし、ましてや他の家に用事があるなら、使いの人を遣るべきである。また、実家のことを褒めるべきではない。
- 一七、 使用人がたくさんいても、すべてのことにみずから勤めるのが女の作法であり、常に家の内において、みだりに外に出るべきではない。
- 一八、 使用人にも注意を払い、おしゃべりで悪い使用人は家を乱す原因になるから追い出すべきであるが、少しのあやまちであれば怒りをこらえるべきであり、決まり事を厳しく教えて、きちんと働かせるようにしなければならない。褒美をやるときは、けちけちしてはいけないが、やたらに与えてもいけない。
- 一九、 女は、従順でない／怒り恨む／悪口を言う／ねたむ／知恵が浅い、という、五つの心の病を持つている者がほとんどである。女は「陰性」で、やるべきこともわからない愚かな存在な

ので、夫の言うことに従うべきである。まず夫を立てて自分を後にし、自尊心を捨てれば、家の中はうまくいく。

↑ 貝原益軒『和俗童子訓』。ただし、益軒自身には、敬天思想に基づく人間の平等観があったが、「女大学」ではそれらはすべて捨象されている。

㊦ いにしへ、天子より以下、男は外をおさめ、女は内をおさむ。王后以下、皆内政をつとめ行ひて、婦人の職分あり。今の世のならひ、富貴の家の婦女は、内をおさむるつとめうとく、織り・縫ひのわざにおろそかなり。いにしへ、わが日の本にては、かけまくもかしこき天照大神も、みづから神衣かんぎをおりたまひ、齋服いはいふく殿にましましける。

(貝原益軒『和俗童子訓』)

↑ 基層に流れる「女の力」

4 敬して遠ざけられる女の力

㊦ 祭祀・祈禱きとうの宗教上の行為は、もと肝要なる部分がごとく婦人の管轄であった。巫みこはこの民族にあつては原則として女性であつた。……薩摩のごときはつい近い頃まで、婦人を憎みきらうことをもって、強い武士の特徴としていたこと、西洋のシバルリーとはちょうど正反対で、戒律のやかましい聖道の僧などよりも、さらに過ぎたるものがあつた。堂々たる男子がわずかの接近をもつて、すぐにめめしさ柔かさにかぶれるものと信じたはずがない。きたないとか穢けがれるとかいう語で言い現わしていたけれども、つまりは女には目に見えぬ精霊の力があつて、砥石といしを跨またぐと砥石が割れ、釣竿・天秤棒をまたぐとそれが折れるというように、男子の膂力りよくと勇猛とをもつてなし遂げたものを、たやすく破壊し得る力あるものごとく、固く信じていた名残に他ならぬ。……女の力を忌み怖れたのも、本来はまったく女の力を信じた結果であつて、あらゆる神聖なる物を平日の生活から別置するのと同じ意味で、実は本来は敬して遠ざけていたもののようである。

(株式会社 KADOKAWA 柳田国男『妹の力』)

㊦ 「たおやめぶり」というのは、けつしてシンの弱さを言うのじゃなくて、むしろシンの強さを言うのですけれども、愛情などの表現の仕方で、原形日本人といえますか、もとの日本人というのは、どうも「たおやめぶり」という匂いが強くします。

(中公文庫 司馬遼太郎／ドナルド・キーン『日本人と日本文化』)

5 近代日本の女性差別批判①——福沢諭吉の「女大学」批判

・天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずといへり。(男女にも適用)
・独立とは、自分にて自分の身を支配し、他に依りすぎる心なきを言う。自ら物事の理非を弁別して処置を誤ることなき者は、他人の智恵に依らざる独立なり。
・そもそも世に生れたる者は、男も人なり女も人なり。この世に欠くべからず用を為す所を以て云えば、天下一日も男なかるべからず、又、女なかるべからず。(以下、現代語訳) (子孫を増やし社会を形成するということからすれば)男女は同様であるのだけど、異なっているところがあつて、

これは男が強く女が弱いことだ。大の男の力で女と闘うならば、必ずこれに勝つことができる。すなわちこれが、男と女の同じでないところである。今世間を見てみると、力づくで人のものを奪うか、または人を辱める者があるのならば、これを罪人と名付けて刑罰を行うことがある。そうであるのに、家の中では公然と人を辱め、かつてこれが咎められたことがないということはどういったことだろうか。

女大学という本には、婦人の道に三従の道というものがあり、幼き時は父母に従い、嫁いるときは夫に従い、老いては子に従うべし、と書かれている。幼い時に父母に従うのはもつともな話ではあるのだけど、嫁に行ってから夫に従うとは一体どういった意味で従うということなのだろうか、その従う様を問わないわけにはいかない。

……つまるところ、これは、男は強く女は弱いということによって、腕の力をもとにして男女上下の名分を立てた教えに過ぎない。

（福沢諭吉『学問のすゝめ』）

・女大学は古来女子社会の宝書と崇められ一般の教育に用いて女子を警しむるのみならず女子がこの教に従って萎縮すればするほど男子の爲めに便利なるゆえ男子の方が却て女大学の趣意を唱え、以て自身の我儘を恣にせんとするもの多し。……女子の身に恥ず可きことは男子に於ても亦恥ず可き所のものなり。

（福沢諭吉『女大学評論・新女大学』）

↓ 独立自尊の存在として男・女

6 近代日本の女性差別批判②——与謝野晶子 男らしさ／女らしさについて

与謝野晶子「『女らしさ』とは何か」

そもそも、その「女らしさ」という物の正体は何でしょう。我国では女子が外輪に歩くと「女らしくない」といつて批難されます。また女子が活潑な遊戯でもすると「女らしくない」といつて笑われます。そうすると、内輪に歩くということ、人形のように温順しくしているということなどが「女らしさ」の一つの条件であることは確かです。しかし日本ではそうでしょうけれども、欧米の女子は悉く外輪で歩いています。… 我国の歴史を見ただけでも、女帝があり、女子の政治家があり、女兵があり、幕末の勤王婦人等があつて、…その他の女子も倫理的の価値を以て、それぞれ国民の尊敬を受けています。……

論者はまた、「女らしさ」とは愛と、優雅と、つつましやかさを備えていることをいうのである。その反対に「女らしくない」ということは、無情、冷酷、生意氣、半可通、不作法、粗野、軽佻等を意味するのであるといわれるでしょう。しかし愛と、優雅と、つつましやかさは男子にも必要な性情であると思ひます。それは特に女子にのみ期待すべきものでなくて、人間全体に共通して欠くことの出来ない人間性そのものです。それを備えていることは「女らしさ」でもなければ「男らしさ」でもなく「人間らしさ」といふべきものであると思ひます。人間性は男女の性別に由つて差異を生ずる性質のものでないのですから、もしこれを失う者があれば「人間らしくない」として、男女にかかわらず批難して宜しい。しかるに従来は男子に対してそれが寛假され、女子に対してのみ「女らしくない」という言葉を以て峻厳に批難されて来たのは偏頗極まることだと思ひます。……

論者はまた言うでしょう、子供を生みかつ育てることは女子でなくては出来ない。従って「女らしさ」の主要条件は母となることである。しかるに女子解放運動は、女子をしてその母性を失わしめるから宜^{よろ}くない。新しい女子は母たることを回避すると。

私はこれに対しても、その母となるということが「女らしさ」という言葉で尽すべきものでないことを述べて、第一に訂正したいと思います。如何にも、女子でなければ妊娠することの出来ないのは事実ですが、これがために生殖のことは女子の独占であると思つては間違ひです。妊娠ということが男子の協力に待たねばならないのを初めとして、子供を養育するにも、教育するにも、父と母との両者の愛、両者の聡明、両者の労力を合せることが必要です。従来は余りに父性が等閑にされていきましたから、母性に不当の重荷を課して、生殖生活は女子のみの任務のように誤解して来ましたが、この事もまた男女に共通した「人間的活動」です。形に現れた所の相異を見て、男子には軽微で、女子には重大な任務であると速断してなりません。人の親になることは、両者に取って共に重大な任務であるのです。

従つて生殖の生活を母性にのみ帰してしまつて、「女らしさ」の主要条件とするのは不当です、形と作用の上において父と母とに分れていても、親としての精神は男女同一であつて、ひとしく人間性の表現ですから、一方に偏した「女らしさ」という言葉を以て評価すべきでなく、両者を統一した「人間性の表現」もしくは「人間的活動」という言葉を以て称すべきものと思います。……

(岩波書店 『与謝野晶子評論集』)

平塚らいてう「元始女性は大陽であつた。——青鞜^{せいとう}発刊に際して」

元始、女性は大に太陽であつた。真正の人であつた。今、女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く、病人のやうな蒼白い顔の月である。…真正の人、…天才は男性にあらず、女性にあらず。男性と云ひ、女性と云ふ性的差別は精神集注の階段に於て中層乃至下層の我、死すべく、滅ぶべき仮現の我に属するもの、最上層の我、不死不滅の真我に於てはありやうもない。

7 女らしさから人間らしさへ

歌人としての与謝野晶子

やは肌のあつき血潮に触れも見でさびしからずや道を説く君

その子二十^{はちくし}櫛に流るる黒髪のおごりの春の美しきかな

ゆあみして泉を出でし我が肌に触るるは苦るし人の世^よの衣

いとせめてもゆるがままに燃えしめよくぞ覚ゆる暮れて行く春

しら刃もてわれにせまりしけはしさの消えゆく人をあわれと思ふ

↓きらめき立つ官能(「女らしさ」・「男らしさ」)↑↑「人間らしさ」一般

各々に特異なものを決して還元し漂白することのない仕方、きわだたせ交響するという仕方。

(講談社学術文庫 見田宗介『現代日本の感覚と思想』)